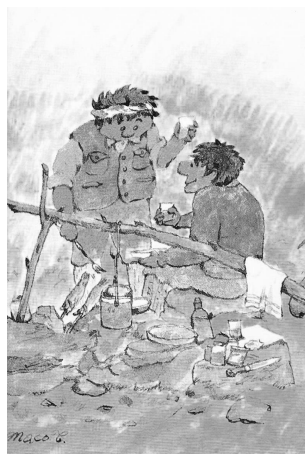

一部50円です



新年に思う

送られてくる年賀状の中で、毎年気になるのが何枚かある。たいへん親しかった先輩や友人からのものなのだが、この数少ない人に私は今も漬物石のように押さえつけられている、という被害妄想に似た感情を抱く事があるからだ。トラウマというやつだろう。相手の方はたぶん、そんな私の気持ちなどは思いも寄らない事であろう。トラウマというやつはなかなか難儀なもので、普段は忘れていたのだが、何かの時に彼らから電話や手紙があると、強迫観念にでも襲われたかのように冷静さを失い、相手の言い分を承諾してしまう。

周りの人に聞くとそういう事はあるようだ。ある人は、小学生の時に参加していたボーイスカウトの班長に今も当時と変わらぬ絶対服従に近い感情を持っているという。半世紀が過ぎても、その相手と接すると昔の状態に戻ってしまうらしい。

親子においても同じような事がある。親は、まったく気にとめず言っていることであっても、聞いている子供は戦々恐々としてびくついてしまうのである。何気なくその時の思いつきで言った言葉が、相手に大きな負担となってしまっているのだ。たいていの場合、自分の放った言葉が相手にプレッシャーを与えているとは当人は気づいていない。相手を想い相手のために願って言う言葉であっても、凶器になることだってある。私も被害者であると同時に、加害者になっているのではないかと思う。後輩や子供たち、あるいは身近な人に強迫観念を植え付けるような言動を幾度も繰り返してきたにちがいない。私は、そのような人と人との間につかえているしこりのようなものを溶かしたいのだ。

最近、私は後輩や友人に与えてしまったトラウマの事を考える。このトラウマをときほぐす事は簡単ではない。しかし、そのままにしておいてもトラウマは消えない。相手のとらわれた気持ちをときほぐし、少しでも心の荷を軽くしてやりたいと思うのである。今年は、これまで親しくしてきた後輩や子供たちと出来るだけ出会い、私はあなたにいろんな事を言ってきたが、本心はあなたの事が好きなのだ。心に気になるわだかまりを作った言動が多々あったと思うが、どうか許して忘れて欲しい。私はあなたに、感謝の気持ちでいっぱい、不足や不満の思いはない。出来るなら、あなたにとって楽しかった私との思い出だけを記憶に止めて欲しい。図々しくも、こんな調子でおわびをしたい、と思うのである。(嘉)

連載 爺捨て山 42

梵店主

人間の欲は、いかようにも変わる恐ろしいものだ、今回の入院生活で知った。己の心の移り変わりの速さに驚くばかりである。

与えられた情況に、自分を適合さす為に無意識に理屈を考え出す思考能力がいじましく、情けなくも思えたのだが、己の生き様をなんとか意味あるようにする為にもがいて自分の気持ちが見え隠れするのがわかる故に許容してしまう。

病状が悪く落ち込んでいた時には元気な時と全くちがった想いとらわれる。死んでよし、生きてよし。すべての変化に対応できるような気持ちになろうとする。心底では、不安なおののいているのだが、表面的には平静を装うように懸命になっているのである。

しかし、『退院』の二文字が出てくると、俄然としてこれまで押さえつけていた欲望が出てくる。食欲から仕事、家族や金のやりくり等など、あれやこれや思案をめぐらすようになる。

爺捨て山は、意識的に欲を減らしていく環境下に身を置くようにするわけであるから、どのくらいの葛藤や気持ちの揺り戻しが起こることか想像もつかない。

俗世にいて考える事ではないのかもしれない。

左の靴

年明けと共に気持ちも新たに、あの一品を求めたい。混み合っているのも承知で出かけた。不景気どころ吹く風、人、人、人で、見本を片手に数分待つ、誰一人コトバもない。

「いらっしやい、この品をお求めですか」の声もない。とうとうイスを求めて、左足に靴を当ててみる。や」と声がかかる。

「この品は見本です。左足の靴をもつてきますから、しばらくお待ちください」

左足に靴をはめたまま待つこと三十分、限界あり。店員さんの顔も覚えていない。

一人真つ赤な顔をして怒つても始まらない。見本の靴も、おそらく展示場にぶつけたかも知れない。誰も私の行動は知らないと思う。

三階の婦人服売り場へ行き、この接客マナーのかけていることを口早やに告げた。彼女いわく「いつしよに売り場へゆきましょう」という。

「荒立てることもないから、私が、もう一度、その場所を見て帰宅します」と言っただものの腹の虫が収まらない。

何の事もなかったような雰囲気、ただし左の靴片方は柵には置かれて

いなかった。

何故、何故、私には自分の心に問いかけたが、未だに解決せず。新年早々から、私の本性をあらわに出さなければならぬのか。

愛犬 安ベエー

ああ、やれやれ。今日の仕事は終わった。気がゆるんだのか、湯舟でウトウトしたとたんに、ハックション、大きくしゃみ。

二回つづけて、我ながらびっくり。更におどろき、愛犬 安ベエが飛んできて、湯舟のかどにアゴをのせて、ウンウン。思わず、風呂の中を忘れて、そのまま、安ベエに抱きつく姿、勝手に想像あれ…。

忠犬、ハチ公…。イヤ安ベエー。心配して飛んで来てくれたの、ありがとう。安ベエー、忠犬安ベエー。そのあと、涙、涙、そして、チュウ初めて、キスをした私である。



体罰か暴行か

熊吾郎

S 高校のクラブ顧問の体罰という暴行を受け、自殺したキャップテンの生徒の悔しさは計り知れないと思う。クラブの成績至上主義のほびこる中で、人間にとって大切な信頼感や達成感（成就感）を生徒と一緒に喜べない教師が力をもっている学校は不幸だ。

元プロ野球選手の桑田真澄氏が自らの体験から「体罰による指導は一番安易で卑劣な方法で、対等な関係でなく服従を強いるものだ。体罰する側の前提として相手が絶対反発してこないという関係がある。厳しい指導でよかったという人もいるが、それは今の成功した自分があるからだ。そうならない人はそうは思わない」また「服従を強いられた中で成績をあげても、自分で考えようとならないから一流にはなれない」とはっきり言われていた。

俳句

土田 裕

もう一つの問題は暴力は受け継がれるという暴力の連鎖の問題がある。体罰を受けた人は次の世代にもふるうという。私も父親からよく体罰を受け、いつか大きくなったら仕返ししてやろうと思っていた。知らぬ間に自分の子どもにも手を出したことがあったが、ある時この時の自分を思ってたが、ある時この時の自分を思ってた。断ち切るのも人間だ。今市長の暴走が教育を混乱させているが、生徒が一番被害を受けないよう切に願っている。

『人気のデザイン』

留袖ドレス

*

ここ数年、黒留をリフォームして欲しいという希望が多いです。限られた用尺の中で提案できますが、柄をどこにもってくるかで、イメージを膨らますことが出来ます。興味のある方は、お気軽にご相談にいらして下さい。

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~

《關病記》

焦り1

梵店主

示にしたがった。
しかし、3ヶ月を過ぎてても、血液検査の数値は一向に下がらなかった。担当の医師は、薬を変えては経過を診ていたが、それでも改善はしなかった。

今から一年半前の夏、よっちゃんは、鼻の蓄膿症を治す簡単な内視鏡手術を受けた。数日の入院で治ったのだが、その時、担当の耳鼻科の医師から「血液検査の結果から異常に高い項目があります。クレアチンキナーゼ（CK）という筋肉運動に必要なエネルギーを代謝する酵素が異常に高い。他科の先生方に一応診察していただきます。よろしいか」といわれた。よっちゃんは、半信半疑で「ハイ」と返事しながらも、これまで病氣らしい病氣をせずに生きてきた為か、何かの間違いだろうとタカをくくっていたのである。

「病名が判らない」と言う医者もおかしなもんだ。判らなかつたら調べるなり同僚の医師に聞いて研究するのが医師の務めだろう、などと知り合いの者が忠告してくるが、よっちゃんは、弱っていく自分の身体を持て余し、新たな治療施設を探す気力も体力もなかった。なるようにしかならない、という諦めの境地に半分なっていたのである。

その後もよっちゃんは、酒も飲みタバコも吸うという相変わらずの生活が続いていた。他の科の診察を受けるも、神経科の医師は「わからん」という返事だし、循環器の医師も「よくわからん」という。ひとり消化器科の医師だけが、よっちゃんの酒好きという言葉から、肝臓障害が起きていて、その為にCKの値が高いのではないかと疑ったのである。肝炎の投薬を始め、よっちゃんには「禁酒禁煙」を指示され、泣き泣き翌日から先生の指

年末の頃になると、イスに腰かけているのが辛くなり、寝起きや湯舟の出入りにも苦勞するようになってきた。和式トイレに入った時など立ち上がるのに難儀した。こんな症状にも、よっちゃんはどうしていいのか分からず、あきらめと不安とが妙に入り混じった日々を過していたのである。

医師はただ、肝臓の状況を正しく調べため、肝生検という肝臓の細胞を取り出して検査するが、慢性肝炎の初期ではあるが、ボロボロの状態ではなく、それが特別高い値を示すCKの原因とも考えにくいという診たてであった。その後もただ無為なる時間が過ぎていくだけで、よっちゃんの体力低下と足腰の衰えを防ぐ治療は何も見えてこなかった。そんな中、よっちゃんは、諦めとも絶望とも思える厭世観が次第に強くなっていた。

よっちゃんの症状は、周りの者たちが一見しても分からないから、ついつい酒の飲みすぎでなつたんやろ、という具合のとりなしであった。そんな周りに影響されながら、よっちゃんは、弱っていく筋肉を運動不足が原因かとも考えたが、どうも自分の身体の中で異常事態が起きているのは間違いないと思うようになってきた。だがそれを確かめる術がない。依然として筋肉を破壊するほどCKという酵素の数値が高く、通常の50倍から100倍高い異常値を示していたのである。

義兄とその家族（32）

ランドセル事件（姉は自分たち夫婦と、孫と一緒に買いに行きたい、と思っていたが、息子の嫁がインターネットで皮職人とやらの注文してしまった）をきっかけに、姉との関係がこじれた。

姉から「革職人（一個一個手作りするらしい）が人気で、ランドセルが4月に間に合わない」と聞いて、すわ大変、と思つたのだが、嫁は「もちろん、間に合いますよう。間に合わんわけないじゃないですか」と笑い飛ばした。

そのこと自体に、腹が立つたというより、姉の言い方にむかついた。最初に姉から聞いた後、2週間ほどして、私は姉に「本当に間に合えへんのんかな？（嫁に）聞いてみた？」と尋ねたら、姉は心底、軽蔑したように言つたのだ。「私がそんなこと知るわけないやろ！こつちからは、絶対に（嫁に）連絡せえへんねんから」。そこまではいい。その続きで、切れた。「もう私はランドセルから心を離していかなアカンねんから」。

「心を離す」という言い方。姉が信奉している、T先生一派が得意とする表現だ。一体、誰から言い始めたことなのだ。勝手に、ガミガミ言い散らかして、今度は「心を離していかなアカン」って。それなら最初から心を静めて受け止め、うちに電話をしてくるなっちゅうの。

怒りというのは、こちらから発すれば、向こうからも返ってくる。年末、姉は鳥取県の三朝温泉にさつさと予約して、元旦から5日まで帰ってこなかった。

息子一家が泊まりに来るというのを断りたい一心で（としか思えない）。ついでに、母のところに帰ってくる私とも会いたくないしな、というところだろう。

もっとも、お正月に姉夫婦が温泉に行くのは今年が初めてではない。一昨年は大分くんだりまで湯治に行っちゃって、肝心の義兄が大風邪をひいて帰ってきた。

問題は、帰ってきたことを知らせるため、姉が母の家に電話をしてきたときに起きた（と思う）。姉は「温泉で肌がツルツルになった」と話した気配で、それを聞いた母が何気なく言ったのだ。「アンタは肌より心をツルツルに磨かんと」。この言葉に姉は切れた。母の横で聞いていて、私も「その言い草はないで！」と驚いたし、「姉ちゃん、怒ったんちゃうかな」と心配にもなったが、自分が言われたことではないから、あっさり忘れた。親子だし。母は年を取っているし。

だが、姉は忘れていなかった。怒り30倍モードになっていた。1月7日が姉の誕生日なので、私がそれを寿ぐ

（？）つもりで電話をしたら、のっけに言われたのだ。「アンタ、お正月に、お母さんに私の悪口、言うてた？」。すごく陰のある言い方だった。「今まで、お母さんは私に皮肉を言うようなヒトやなかった。アンタ、何か言うてたんちゃう？」

母が何気なく言った言葉が、どうしても私のせいにされるのだ。それに、ランドセルの件では、かなり呆れたが、姉のことを嫌いだと思ったことなどない。少なくとも、今までは。

母が皮肉の一つも言いたくなかったのは、姉がお正月に身近にいなかったからだ。憎くて言ったわけではない。しかも、私のせいにするとはどういうことなのだ？ 私は嫌みたつぷりに言い返した。

「はあ？ 姉ちゃんのことなんか、何の話題にもしてないけど」

申し訳ないけど、そうなのだ。第一家が、嫁のお父さんにハワイに連れて行ってもらっていて留守だったので、母と私は「今頃、ハワイに着いたかな」とか「芸能人に会えたかも」と折に触れてしゃべって、姉ちゃん夫婦が三朝で何してるか、なんてちっとも考えていなかった（あ！ それが悪かったのか！）。もちろん、「お正月料金は高いのに、何でお正月に行くんやろね」ぐらいは言ったが、憎しみのこもった、

皮肉につながるような悪口なんか、金輪際、言つてない。姉の被害妄想、私には冤罪だ。

冤罪？ そう言い切れるだろうか？

私には姉に大きなヒミツがある。この「義兄とその家族」だ。これを書き、「芥川だより」に掲載してもらっていることを姉には内緒にしていた。姉に読まれて

困るところは1行もないのだが（本当のことばかりだから）、姉の息子の嫁に読まれたら（本当のことばかりだから）困る。もし、これがきっかけで、甥と嫁が離婚なんてことになったら、私は一生、甥に合わせる顔がない。甥には、まだ幼い子供が二人いるのだ。離婚という極端なことになるなくても、嫁の心に深い傷、恨み、疑心暗鬼をもたらすのは間違いない。だから、編集長が「和綴本にしましょう」と熱心に（メールで）言ってくれたときも「こ、困った！ 万一、その本が嫁の目に触れたら非常にマズイことになる」とあわてた。

それでなくても、うまくいってない嫁と姑なのだ。「そんなことを妹に言うてたんかつ」（嫁）、「まさか、勝手に書き散らしてヒトを笑いのにしようとったとは」（姉）という展開になるのは間違いない。それも十分困るが、一番困るのは、甥に「なんていうことをしてくれたん。アイツ（嫁）一生、忘れへんで」と悲しそうに言われるであろうことだ。

人生はなかなか難しいのである。家族、親類だから。

これが他人だったら、「えっ、怒ってんのん？ ごめんな！ えっ、まだ怒ってんのん？ ほな、さいなら」で済むが（いや、済まないか）。

とにかく、一生付き合いなしで暮していくことはできないのだ。

姉に背負った大きなヒミツ。姉に対して、「義兄さん、ガンでかわいそう！ 姉ちゃん、頑張れ」という気持ちしかなかった、1月7日までは、ヒミツだ。が罪だとは思わなかった。自分で、姉に「冤罪だ！」と思った瞬間に「姉に罪深いことをしているのは私か」と気が付いてしまった。

まあ、しかし、私はロシア人ではない（罪と罰）ってロシアの小説ですよ、読んだことないので、間違っていたらすみません）から、「罪」かどうかは大した問題ではない（それも怖いけど）。私は大阪のおばはんなので、もっと現実的な問題に青ざめている。この「義兄とその家族」のネタ、材料はすべて姉ちゃんから仕入れた実話なのに、私はその供給源を断ち切ってしまった！（AO）



松浦のマサ子さんの話

藤田和久

私の故郷、鳥取県、旧気高郡^{けたか}は、世界一美しい里です。気高郡に酒津^{さけつ}という漁港があります。鳥取県民でも知らない人が多い、小さな小さな漁港です。

少年時代、その日の朝に水揚げされた魚を、リヤカーに積んで、2キロ程離れた酒津から売りに来る、松浦のマサ子さん（さん）というアバサン（おばちゃん）がおりました。色の黒い、みったむない（器量の悪い）アバサンでした。いつも手ぬぐいで、頭髪を包んでいたと思います。役者の渥美清に似ておりました。ただし小学生のときは、まだ渥美清の名前も知りませんでした。

私の母も、近所のアバサンたちも、魚は現金より掛け買いのほうが、多かったかもしれません。小さな掛け帳を持っておりました。松浦のマサ子さんは、小学校へまともに行ってなくて、5、6、7の数字が書きませんでした。自分にしかわからない記号を考案していました。顧客の近所のアバサンに「マサ子さん、そんなんで、わかったかいな（わかるんですか）」とつつこまれて「ええだいな、わしがわかったら、それでええだいな」と笑ってごまかして

いたシーンを、半世紀たった今も、はっきり憶えております。

商売していて数字も書けない自分が、悲しかったと思います。みじめだったと思います。ただし、マサ子さんの悲しみがわかったのは、四十代五十代になってからです。高校、大学に進んで、微分積分などの高等数学を学び、問題が解けることも、もちろん大事です。人間としてそれ以上に大事なことは、数字もまともに書けないアバサンの悲しみがわかることだと私は思いますが、どうでしょう。

この文章を書く為に、いろいろ準備していて気がついたことがあります。私は少年時代、松浦のマサ子さんの悲しみが沁み込んだ魚を食べて、身体だけでなく心も育てておったのです。今頃気がつきました。

私の故郷には、松浦のマサ子さんの他にも、ひげ面の《アル中のチョーさん》という男の人が、大きな自転車に魚を積んで、売りに来ていました。子供の心を育てていたのは、じつは学校の先生や、お寺の和尚さんや、町の名士と呼ばれる人ではなく、こういう無名無学な大人であったことに、今頃気がつきました。

芥川だよりの読者の皆さん、無学なアバサンの悲しみが沁み込んだ、サバ、イカ、シイラを食べたことありますか。

かけるもかけられるも同じ迷惑

大江雉兎

最近の山登りは……、というより「アウトドアは」と言った方がいいだろうか。最近のアウトドアは、形から入るものらしい。「山ガール」という言葉がもてはやされ、カラフルなウェアに身を包んでハイキングコースを闊歩するのがブチブームとなった時期もあったが、あれほどではないにしても、アウトドアは形からというのは今も変わらぬテーゼである。「山ガール」を引き合いに出したりすると、その人になんかは言葉を消費財のごとく弄んでは流行を作ろうとする浅薄なビジネスモデルに過ぎないといった意見も出てくる。御説もつとも頷きはするものの、そうした議論は措いておこう。そうして、キスリングと呼ばれるザックを使っていた人種の間でいえば、昨今のアウトドアショップには隔世の感を抱いてしまうと告白しておこう。というのもキスリングと呼ばれるザックは、格好良さの対極にある代物だったからである。山に入れば風景に馴染みこそすれ、街なかでは奇異のまなざしに晒されるだけだった。入山のために、キスリングを背負って駅に向かうぶんはまだマシだ、荷物が歩いていけると言われる程度の揶揄で済むのだから。

ら。たいへんなのは、一週間、二週間、ひどい時には一ヶ月近くの合宿を終えて泥と汗にまみれたキスリングを背負って帰ってくる時である。街なかである以上、その格好のままで公共交通機関にも乗らざるを得ない。おのずと冷たい視線に晒され、ほとんど針の筵に座らされているようなものだ。昨今の装備やザックをみると、同じ世界の出来事とは思えない。もちろんアウトドアに限らず、何事であれスタイリッシュな方がいいに決まっている。それにキスリングに象徴される臭さと汚さに陶酔するほどの自虐趣味は持ち合わせていない。しかし、粹でカッコよくありたいと願いつつ、常に逆行しているのは否定できないし、二択で割り振られるとすれば、私などまっさきにキスリング派に分類されてしまう。

さて、アウトドア論議めいた流れになってきたが、これからの話、テーマは何のことかという、山、もといアウトドアとはまったく関係がない。いわゆる公共マナーなるものについての話なのである。先日、



出くわしたとある出来事から、キスリングをめぐる昔の記憶がフラッシュバックされてしまったわけだが、話の枕が少々長くなってしまった。

ということでは本題。それは先月、つまり正月四日の日、京都市内でバスに乗った時のことだった。日が日であるだけに、いつもよりは混んでいるかなと感じられる車内だったが、そこにでんと一台のベビーカーが置かれていたのである。最近、ネットでも取り上げられているが、バスや電車などの公共交通機関を利用する場合、ベビーカーをどう扱うべきかという議論がある。

混み合っている時などは、周囲に迷惑をかけているのは確実なのだから、親が赤ん坊を抱きかかえてベビーカーは畳むべきだという声が挙げれば、育児に対しては社会全体の配慮が必要との反論が投げ返される。一月四日に出くわしたのは、まさにその実地体験版とでもいえるケースだった。ただ、それだけなら、キスリングがフラッシュバックされるまでには到らなかつたろう。実は、その後に起きたもう一つの出来事が決定的だった。一つ目のベビーカーは、混んでいたとはいえ通勤ラッシュの満員電車ほどではない。言うなら、邪魔なベビーカーだなと、こっそり眉をひそめるレベルである。本音はさておき、表向きだけは育児の大変

さに理解を示しておくこともできるレベルである。ところが、もう一つのケースはそうはいかなかった。

同じ日に乗った二本目のバス、到着して後方の乗車扉が開いた瞬間に異常に混んでいるなという感じがあつた。ほとんど押しくらゐ頭状態なのである。最初は日が日だけに仕方ないかと思っていたが、降車の停留所が近づいたタイミングで前で出たところ、中央付近より前は余裕のある状態となっていたのである。「混み合っていますので一歩ずつ前へ詰めてください」とアナウンスもあつたようだが、車内は後ろの三分の一だけがいたずらに混み合っていた。原因は車内の真ん中あたりにいたあるご婦人、その人が流れが押しとどめていたのである。さすがに常識すぎると思つたので、「もう少し前を進んだらどうですか、後ろが混み合っているんですよ」と声をかけたところ、荷物がありますからと言って、足下を指さすだけで不動如山。そればかりか、おかしいことを言う奴だとはばかり、ジロリと睨み付けられる始末である。

実は、そのご婦人が指さした先にあつたのがどんな荷物だったかは印象に残っていない。おそらく第三者の印象には残らない程度の大きさだったか、あるいは動くのが面倒なくらいに

分散した袋ものか何かだったのだらう。赤の他人だから、いまさら調べることもできないし、それ以上に、知りたいとも思わない。少なくとも言えるのは、先のベビーカーとは比較にならないくらい、周りに迷惑を掛けているにも関わらず、本人はそのことに全く気づいていないということである。臭くて汚いキスリングを地下鉄車内に持ち込んだ経験に照らせば、持ち込んだ当事者には周りに迷惑を掛けているという自覚もあつたし、何よりも近くにそんなモノを近くに持つてこられるのは嫌だなあとという声にならない声をびんびんに感知していた。だからこそ下山後の公共交通機関は針の筵だったのである。

ところが、正月四日に出くわした荷物ご婦人はそうではなかった。周りに迷惑を掛けていることに気づかないばかりか、指摘されて開き直すタイプだったようだ。掛けられる迷惑には敏感でもかける迷惑には鈍感なのだろう。どこの社会でもそういうタイプの人種が一定の割合で含まれるというが、サンプルにもなりそうな純粹種に出会つたのは久しぶりだったかも知れない。

ベビーカーの一件によって、公共交通機関でスペースを独占することに意識が向けられた後でもあつたので、深く印象に残る荷物ご婦人だった。

私の海外経験 15

米国時代 8 (78 年 12 月 ~ 84 年 1 月)

土田 裕

対米貿易

総合商社という存在は日本独特のものであり、戦前は輸出入商いの先兵として機能していた。昭和二年 GHQ によって三井のような財閥系の商社は二〇〇以上の零細会社に分割されたが、長い苦難の時代を経て昭和三四年に漸く大合同を実現した。

私は昭和三八年入社なので、会社は大合同後四年経ったばかりで、未だ再建途上であつた。新入社員の四年間は、神戸支店運輸部で輸出船積手続き、輸入荷捌きなどを学んだ。その後、大阪支店物資部で初めて輸出営業に従事することになるが、昭和四〇年代は「商社、冬の時代」と言われ、新規商売の発掘には苦労した。鉄鋼、石炭、化学品などの伝統商品は商社経由でのルートが確立されていたが、物資のような製品商売の場合、大手のメーカーはすべて海外に独自の販売会社を持ち、直買が原則であり、商社の介入する余地は殆どなかった。

特にアメリカは彼らの最大の市場として注力しており、駐在員も商社よりも多くの人間を派遣していた。従って商社は、輸出よりも輸入商いに活路を見出す他なく、

三井の場合でも機械部がGE重機部門の代理店（福島原発プラントの一部からんでいた筈）となり、また、ユニバックと大型コンピュータの日本販売会社を設立していた。

物資部はブランドウィックとボーリングの販売会社を設立した。物資部は、日本の中小企業でまだ米国に販売拠点を持たない会社を探して、米国への売り込みを図ったが、売れ筋商品を持つ会社はすでに米国進出を果たしており、新商品開発は簡単ではなかった。

米国へ行って最初に気づかされるのは、殆どの中小の客先は「三井」の名前を知らないことであった。まずMITSUIというスペルを繰り返すことから始めなければならない。会社の名前を告げると「ハウ・ドゥ・ユースペル？」と来るので「エム・アイ・ティ・エス・ユー・アイ・」と繰り返すことになる。

やむを得ないことだが、アメリカで知られているのはソニー、トヨタ、パナソニック、ホンダなどで三井を知っているのは一部の大企業だけであった。

物資部の場合、いままで対米輸出の実績のない商品売り込むので、興味を示すのは中小の個人企業が大半であった。商売はできても相手に資金力がないので、お金の回収には大変苦労をした。アメリカには日本のような手形制度がなく、小切手が銀行振り込みで債権を回収

することになる。信用保険もあるにはあるが保険料が異常に高く、これを価格に上乗せすると競争力が無くなるので、裸信で商売を進めるしかない。

例えば先に述べた自転車の場合、すべてが個人企業で信用保険会社も引き

受けないので、小切手で債権回収を行うことになる。自転車のディーラーは冬場に仕入れて春・夏に売ってから代金を支払ってくるので、品物納入後、代金回収まで約4〜5カ月かかる。売れ行きが悪いと途端に支払いが遅れるので、物資課はシカゴ店のパストデューキングと言われていた。つまり毎月、経理課から債権回収遅延リストが回ってくるが、物資課の件数が常に一番多かった。それでも幸いにして5年間で倒産に遭遇したことは無く、不良債権の発生は略ゼロであった。

近年、三井に限らず大手商社の業績は絶好調で、私が現役であった時の純益の5、6倍も稼いでいる。その理由は石油、天然ガス、鉄鉱石、石炭など商社が得意とする原材料の価格が高騰し口銭が急増したことや、海外資源への投資に対する配当が増えたことによるものである。

商社の海外店の役割も変化し、輸出から輸入に重点が移った結果、機械部、繊維部、物資部のような製品商売を主力とする海外店は整理縮小されてしまい、物資、機械商売で稼いでいたシカゴ支店は

数年前に廃止されてしまった。同じころ、ハンブルグ支店も廃止されて、両店のOBとしてはいささか寂しい思いをしている。

米国英語

米国では、友人はもちろん商売相手もファーストネームで呼ぶのが習慣となっている。外国人の場合はファーストネームのイニシアルから類推される英語名を考えることになり、例えば、私の前任者は「勝（まさる）」だったのでMark（マック）としていた。私も着任早々ニックネームを考えることになったが、私のファーストネームは「裕（ゆたか）」

なのでYで始まるニックネームを探したがなかなか適当なものがなく、困ったあげく、シュインの購買担当者に相談したらユタ州のUtahで良いではないかと言われ、なんとなくユタになってしまった。ユル・ブリナーのYulでもよかったが、有名人と同じ名前でも格好悪いのでやめた。

ドイツではファミリーネームで呼ぶのが一般的で、ドクターなどのタイトルを持っている人は名前の前に必ずタイトルも付けねばならず、「ヘル・ドクター・シュミット」等と回りくどい言い方をしなければならな

いが、米国では敬称もなく「ハイ・ボブ」「ハイ・ジョージ」で済んでしまう。人にもよるが得意先の場合は初対面でも十年の知己のごとく話すのが米国流でこの点はやり易い。

アメリカン イングリッシュは省略が多く、最初はかなり戸惑うことになる。「ハイ・ボブ、ハウイ・ドゥ・イング」とか「ハローボブ・ホワッツ・アップ」は「ハローボブ、ハウ・アードゥ・イング」の省略であり、「オキ・ドキ」とか「ガット・ユー」は「オッケイ・アイ・アンダースタンド」だが、日本人が言うのと何となくぎこちなく聞こえるので、私はあまり使わなかった。

古い世代は別として日本人の大半は中学生から英語を習っており、大卒なら一〇年間は英語を履修することになるのだから、英語圏での勤務に問題はないと思われるが、実はそう簡単ではない。なぜなら我々の世代の学校での英語授業は「読み・書き」が中心で海外生活では必須の「聞く・話す」授業を殆ど受けていないからである。

三井の場合でも、入社してから英語の試験があり、昔は英検の二級以上、今はTOEICの七五〇点以上が海外派遣の最低条件になっている。私はたまたま学生時代からESSに所属し、英会話には興味があり、入社後すぐに英検一級に合格したので、英語にはある程度の自信が

あった。それでも着任後、数カ月は電話を取るのが億劫であった。

アメリカは合衆国と称するように人種のるつぼなので、日本でいう「外人」という感覚がなく、米国人は誰とも同じスピードで話をする。それでも対面で会話するときは相手の表情を見ながら話すので、相手の言うことが分からないことはなかったが、電話でそれも初めての相手と話す場合、早口でまくしたてられると良く分からないことがあった。アメリカでも北部は標準的な発音で分かりやすいが、南部英語は口を殆ど開かず話すのでまことに聞き取りにくい。自転車商いでアトラクタの代理店と話すときは相手の言っていることの半分くらいしか聞き取れず、大変苦労した。同様にドイツにいたときに英国人と話す機会があったがKings Englishも米語とは違った表現をするので、非常に聞き取りにくいという経験をした。TVの番組もニュースなどは比較的聞き取りやすいが、バラエティ番組などは半分くらいしか分からなかった。

但し「ドイツ時代」でも触れたが語学の能力と商売能力には直接の関係はなく、とつとつでも自分の言いたいことを相手に正確に伝える能力さえあれば、商売にはまったく影響がないと思う。

悪夢ふたたび（2）

福島第一原発はいまどうなっているのだろう。津波と原発事故で痛めつけられた福島の復興は進んでいるのだろうか。メディアはほとんど報道しない。三月一日が近づいてくると、思い出したかのように特集を組むのであるうが、まるで風化してしまったかのようだ。炉心がメルトダウンした一、二、三号機はどうなっているのか。原発事故の核心である四号機の使用済み核燃料はどうなっているのか。

アメリカやフランスは、事故後数日で自国民に避難勧告を出した。それは四号機の爆発によって放射能が拡散し、東京までもが汚染されるからだ。外国人が関西に避難し、それに促されるように金持ちが移動した関西では、ホテルの満杯状態が続いた。四号機の危険については日本国民には知らされていなかった。政治家もジャーナリストも一部しか知らなかっただろう。今も多くの国民は知らないかもしれない。

四号機が爆発しなかったのは、神のはからいとしかしいようがない。二つの偶然が重なって爆発を免れたのだ。それは、四号機で行われていた工事が遅れて、本来水のないプールに満々と水がたたえられていたからであり、そ

のプールの水が、たまたまずれていた仕切り板のすきまから隣の使用済み核燃料の部屋に流れ漏れていたからである。その水によって1500本を超える使用済み核燃料が冷やされ、爆発しなかったのだ。爆発していれば、放射能が広範囲に拡散し、東京は福島に見られるようなゴーストタウンと化し、いまの日本はない。

こんな状況に立ち至っていたにもかかわらず、この地震多発国で原発を再稼働しようとか、新たな原発をつくらうなど考えるのは正気の沙汰ではない。昨年暮れの総選挙で大勝した自民党は、過去の反省のないまま原子力村温存、原発推進が本音である。

死票が多く、民意が議席数に反映しない小選挙区制は憲法違反じゃないかと思うのだが、昨年暮れこの国の人々は自民党政権を選んだ。争点は原発、消費税、TPPがあったが、人々は目先の経済政策を重視したようだ。格差社会受けいれ覚悟なのだろうか。

安倍は、メディアがはやし立てるアベノミクスとやらで景気を上向かせ、参院選で勝利して、いよいよ自らの最終目標、改憲へ向かおうと考えているのだろう。自衛隊を正規軍にし、集団的自衛権を行使して、アメリカとともに海外で戦争ができる国にしようというわけだ。

安倍は五年前と同じ「価値観外交」なる政策をやるうとしていているようだ。自由、人権、民主主義という価値を共有する国々が連携していこうというわけだが、五年前にはこの政策を実行しようとして大恥をかいている。安倍がインドを訪れ、外相の麻生太郎がオーストラリアを訪れて、両国に断重にやったほうがいいよとたしなめられる始末だった。この外交には価値の異なる中国は当然入っていない。むしろ封じ込める意図があり、アメリカも喜んで乗ってくれろと考えたのだろう。性懲りもなく、同じような政策を打ち出している。こんどは東南アジアも加えて、中国封じ込めをますます強めようと考えているようだ。

改憲して、国家、公益のためには国民の自由や人権を抑制してもいいんだと考えている安倍や麻生が、何が価値観だ、笑わせるな。

小泉から安倍に変わり、福田、麻生と首相がころころと変わったのだが、OECD（経済協力開発機構）の諸国は三人をどのように見ていたかというと、「無能」である。あまりの無能さに欧米諸国の嘲笑を買っていたようだ。

五年前は選挙を経ていないが、今回の安倍、麻生の再登場は選挙の結果である。欧米諸国はこんな日本をどのように見ているのだろう。安倍自民党を大勝ちさせたこの国の人々はやはり愚民か。（猿）